

砂漠に向かって

SUR LES FLEUVES DE BABYLONE * Ⅱ

森 有 正

筑摩書房

森 有正 もり ありまさ

1911年 東京に生れる

1938年 東京大学仏文科卒業

東京大学助教授を経て

現 在 パリ大学・東洋語学校講師

著 書 「バスカルの方法」「デカルトからバスカルへ」

「デカルトの人間像」「デカルト研究」

「近代日本とキリスト教」「内村鑑三」

「バビロンの流れのほとりにて」「流れのほとりにて」

「ドストエーフスキー覚書」「城門のかたわらにて」

「遙かなノートル・ダム」他

訳 書 アラン「わが思索のあと」ブトルー「バスカル」

リルケ「フィレンツェ日記」他



砂漠に向かって

© 森 有正 1969

昭和45年1月10日 初版 第一刷発行

昭和46年7月5日 初版 第四刷発行

著 者 森 有 正

発 行 者 竹之内 静 雄

発行所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2-8

振替東京 4123

Tel (291) 7651 (代) 郵便番号101-91

明和印刷 和田製本



定価 720 円

(分類) 1010 (製品) 84017 (出版社) 4604

目次

砂漠に向かつて

3

フランスだより

フランスだより (第二信)

297

ジイドの死 (第二信)

305

新しい空間にたつて (第三信)

310

あとがき

317

沙漠に向かつて

ノエルの季節には、曇まじりの冷雨がよく降る。それが雪になることもあって、緯度の高いパリでは、暗い寒い日が続く。しかしメキシコ湾流の影響で、ロシアや東ヨーロッパのような極寒はない。ノエルはとにかくにも、キリスト教国であるフランスの社会全体が祝祭と交歓の気分にはたるときである。遠い日本からここに一人で来ていると、そのことが殊に身に沁みて感ぜられる。一昨年、パリに着いた年のノエルは、中央市場（レ・アル）の真中にあるサント・ユスタシュ教会で深夜のミサを聴いた。歌の旋律と光に充ちてはいても、石造りのルネサンス期の古く、天井の高い教会堂の中は、外套にくるまって坐っていても、がたがた慄える位寒かった。外はひどい雪の吹き降りだった。盲人のオルガニスト、アンドレ・マルシャルの奏く、ゴンザレス・オルガンと呼ばれる古いパイプ・オルガンの和音が、合唱とともに、明るく冷たい堂内を揺り動かしていた。昨年、ノエルは、ノートル・ダムのトランセプトに立って、ミサを聴聞した。金色の祭服を纏った新任の大司教は、宵の口から雲集している会衆の方に向かって、式を挙げていた。その日は朝から雨の一日だった。一昨年ほどは寒くなかったような気がする。そのあとで、暗いケーを歩いてからもう人けも途絶えがちになった、閑散としたサン・ミシエルの広場の一隅で友人たちと夜食をたべた。一般にクリスマスには、気候は寒くても、夜が長く暗くても、心の花やぐ華麗な色彩が町に流れている。明るい、飾りたてたショールウィンドーだけではなく、私たちの心まで、明るく暖かに和むものである。少くとも、フランスに来るまではそうだった。しかしパリに一異国人として来てみると、なかなかそういうものでないことが

判ってきた。人々と賑やかに過しても、そうでないことが判ってきた。そのことが殊に痛切に感ぜられる年もある。

二十四日の午後、一人で町に出た。時雨れて曇った暗い午後だった。ホテルのすぐ横を南北に通っているサン・ジャック街は、相変らず人波でごたごたしている。サン・ジャック街がアベ・ド・レペ街と交叉しているところは、カルティエ・ラタンの中でも一番美しいところの一つである。アベ・ド・レペ街の西のつきあたりには、リュクサンブールの公園のみどりが深く呼吸づき、反対の方角、ゲーリュサッタ街につきあたるところには、十七世紀の僧院の建物が枝の密集した冬枯れの木立ちの中に半ばかくれている。ノエルの前日であるこの日は、真黒で四角な箱のようなサン・ジャック・デュ・オー・パ（峠のサン・ジャック）教会だけは、太い柱が二本ずつよりそって立っている古典様式の玄関前を奇麗に掃除して、太って赤ら顔の元気そうな司祭が石段の上に立って町を眺めている。道路に向って開け放たれた正面玄関から往來をこえてひと気のない堂内をのぞいてみると、花で飾られた奥の祭壇には、二本の蠟燭がうす暗い中にほのかにゆらめいている。時雨に黒く濡れた石の舗道を教会の側へ渡って、二、三十歩右へ歩き、間口三メートルほどの黄色いペンキを塗ったわびしいレストランの前に立つ。空には墨のような雲が絶えまなく流れ、まだ午後二時を少し過ぎたばかりなのに、辺りは黄昏のように暗い。例年になく暖い気候に、外套の代りにアンペルメアール（レインコート）を着た男女が目の前を行き交っている。ふと右手に人影が立ち止まったのに気がついた。ノエルだということによれて破れた外套を着て、踵の擦り減った靴を穿いた中年の男だ。何ということもなく、パン

屋のヴィトリヌの中を見ている。明るく照明をかけた、大きい、ヴィトリヌの中には、デコレーション・ケーキや色々の形のパンが山のように積んである。赤ちやけた口ひげ、汚れた、肉のあつぽつたい、人の悪くなさそうな彫りの深い顔、ボタンを外した外套の下には、襟の黒ずんだワイシャツと擦り切れたぼたぼたの茶色の背広の襟がのぞいている。何か判らぬ白い汚れた染みの一杯ついたきたない黒のよれよれのソフト。こういう男はパリに沢山いるが、みな言うことが少し変だ。男は青い眼をしていた。ノルマンディーの人間かも知れない。私は一瞬男に目を止めてから、ドアを推してレストランに入った。中は明るかった。びっこで、決して笑わぬ大男の主人が大きい手をさし出す。この男は、人が言葉をかけなければ決して口をきかない。第一次大戦の戦傷者かも知れない。しかしそんなことを訊くわけにもいかない。いつでも、冬でも、上衣をぬぎ、そり身になっていて、目を細めてものを見る。しかし私が入って行くと、黙っていて、すぐ赤葡萄酒の小ビンをもって来る。メニユーをもって来る。それからこれも大女で無表情な娘を呼んでサーヴィスをさせる。このレストランでは、私は一度もイライラした経験がない。忙しい時は、大声でよんでも知らぬ顔をしている給仕が多くなってきたのに、この男の店では、どんなに人が立てこんでいそがしい時でも、呼べば主人か娘が必ず返事をしてくれる。午後も二時をすぎているので、この場末のレストランにはもう客もなく、奥行の長い食堂には、粗末な小さい八つの食卓が壁に沿って並んでいた。主人はすぐ葡萄酒とメニユーをもって来る。テレンプの食卓布が新しいのともう替えてある。メニユーには例によって、七、八種類の料理が読みにくい字で書いてある。オムレツ、落し玉子、トリープ・ア・ラ・モード・ド・カーン（牛の腸の料理）、セルヴェル・ド・ヴォー（積の脳味噌）、ビフテキと馬鈴薯の油いため、鱈のパタ

いため、それから野菜、オムレツの八十フランから、一番高いのも百四十フランをこえるのはない。オムレツとスパゲッティを注文する。主人が娘を呼びに行こうとするので、「別に急がないから来てからでよい」というと、「何すぐ降りて来ますよ」と言つて、階段の下まで行つて、「マリー・ルイーズ」と大声で呼んでいる。足が悪いので階段の下まで辿つて行くのが氣の毒だったので私は急がないと言つたのだが、その時主人が私を見た目には、柔和な光が宿つていた。私は救われたような氣持がした。

レストランを出て、本屋でフィガロを買つて、雑踏するサン・ジャック街を真すぐにセーヌに向つて下つてゆく。レストラン、安宿、食料品店、古本屋などがごたごた並んでいる狭い道を少しゆくと右手にパンテオンの見える広いスフロ街を横切る。空はますます暗く、向う側の石の家は真黒だ。周廻式一方交通のパンテオンの前の広場を自動車が行き交ひに廻っている。風がリュクサンブール公園の方から吹いてきて、糠のように細かい雨を冷たく顔に吹きつける。手にしていたフィガロを外套のポケットにおしこむ。こういう日は一枚の新聞が心の拠りどころだ。左手の、ブルヴァール・サン・ミシエルの左右の角に、カフェ・マユとキャブラードが、ガラス張りの赤や黄で華やかなテラスを出して、人がしきりに出入りしている。毎日のようにゆくそれらのカフェーのガラスとその赤い黄色いテラスの屋根幕が、何の關係もない、外の世界、あるいは過去の世界の存在のようにみえる。サン・ミシエル大通りには自動車と自転車と人間とが色彩もなく流れている。

ばかに幅の広いスフロ街をこすと、サン・ジャック街も幅が広くなる。そして急に人通りがなくなる。道は一路遙か向うのセーヌの岸へとかな坂になつて下つて行く。空が、セーヌをこえて、

はるか彼方まで拡がってみえる。左側のソルボンヌの文、理科、右側の法科、リセ・ルイ・ル・グラ
ン、コレージュ・ド・フランスの建物が、下ってゆくサン・ジャックの石畳を両側から石の壁のように
かこみ、全体が石造の大きい溝のようだ。セーヌの向う側は、霧の中に灰色にかすんでいる。その中
にパスカルが真空の実験をしたサン・ジャック・ド・ラ・ブーシュリ塔が立っている。その景色の感
じの冷たさは一年半ほど前に、マロニエの咲く頃、シャン・ド・マルスに住んでいた時、私はあの辺
の豪壮な石のテパートの集団に圧倒された時と似ている。それは強い抵抗性のある、堅い感じだった。
それに気がつくのに一年かかった。それから一年半たって、その堅さは、そのまま寒々とした冷たさ
に変化した。歩道の下に口を開いている長方形の穴から、道路の雨水がエグー（下水溝）に流れこむ。
紙切れやバナナの皮やシガレットの吸い殻がくるくる廻転しながら吸い込まれるようにその中に入っ
てゆく。私は外套のポケットに両手をつつこんで、ラバーソル底の靴がぬれた舗石に滑らないように
気をつけながら、サン・ジャック街を下ってゆく。私は何も考えない。早く道を下りつくして、セー
ヌの角のカフェー・ノートル・ダムで一杯のカフェー・オー・レーをたのみ、一本のシガレットを吹
かし、フィガロの連載小説を読むのを楽しみにしている。リユー・デ・ゼーユル角からまた両側に
店が並びはじめる。左手のソルボンヌの正面玄関の向いに、今は中世タピスリ的美術館になっている
古いクリュニー僧院を背景にして、モンテーニュの石像が腕をくみ、椅子に腰を下し、闇の中に何か
考えている。パリへ来た頃あれほど好きだったこの像に、今はもう何の関心も感じない。リュクサン
ブールの公園の奥のボードレールの像に対しても同様だ。モンテーニュの像の台石には、かれがパリ
をたたえた句が彫ってある。ボードレールの台石には、憐み深い神に告げる永遠の淵からの人類の叫

びを唱ったかれの詩篇の一句が刻んである。それらを読んでも、もう何の感動も起らない。ただそこに冷たい、寒々とした、白い石があるのを感じるだけだ。私はそれらをただの石でできた装飾として感ずる……。しかしもしそれがモンテーニュやボードレールではなく、つまらぬ軍人や政治家の像だったらどうだろう。そしてその下に相もかわらぬデマゴジ的文句が刻んであったらどうだろう。勿論何の感動も起るまい。しかしこの二つの無感動は、私にとって、本質的にちがっているようだ。二つの間には無限の距たりが拡がっているようだ。

ケーのカフェー・ノートル・ダムは静かだった。そして仄かに暖かかった。入口のパチンコのようなもので、ガチャガチャ音をさせて遊んでいる皮のジャンパーの青年の外は一人も客がいなかった。いつも坐る、ノートル・ダムの見える、大きいガラス窓のそばにある、腰を下したフォートウイユの赤い皮の弾力のあるしなりは、私の心を一瞬に和めてくれた。カフェー・オー・レーに砂糖のかけらを二つ入れてスプーンでまわしながら、紗のカーテンをすかして、ノートル・ダムを見た。大伽藍は、一面に霞んでいた。その細部は一切ぼやけ、二つの巨大な角塔のある、四角い、規則正しい、重々しい正面が、その大きいモノクロマティックな輪郭と不動の量感をもって、葉の枯れつくした寂しいマロニエの立木の向うにあるだけだった。

ゴローワーズに火をつけた私は、この巨大な四角な石の堆積を眺めつづけた。そして考えつづけた。コーヒー茶碗がとうの昔に空になっていることも忘れて。フィガロの小説を読む事も忘れて。いな《ノートル・ダム》を眺めていることさえも忘れて……。しかし私は本当に何かを《考え》ていたのだろうか。

私は何か恐ろしかった。こんな文章を二日たった今書くのでさえも恐ろしい気がする。しかしその時私の中に去来した事を書き留めておこう。

人間は誰でも錯覚を起すことがある。これはもつともありふれた日常の現象の一つである。錯覚というのは、デカルトも言っているような、舟に乗っていて、陸の方が動くように感じたり、あるいは私たちが日常経験するように、たとえば汽車で旅行する時、通路の出口のガラス戸に風景が逆に動くように映っているのを見て、汽車が実際に走っているのとは逆の方向に進んでいるように思ったりすることから、もつと複雑な錯覚まで色々あるだろう。しかしそれが単純な感覚の領域に限られている間はまだ簡単だ。またその意味では本當の錯覚はありえない。感覚は凡て真実である、とパスカルの言っているように。しかし事柄は、これはもう錯覚という名では呼ばれないのかもしれないが、感覚的な事実がある精神的内容を表現している場合、それを取り違えるというようなことになってくると、問題はかなり面倒になる。感覚そのものの印象とその限りにおける知覚は、別段違っていないのに、その示す内容が間違つてとられるということは、もう錯覚ではなく、意味の解釈の間違いだと人はいかにも知れない。しかしある芸術品、文学作品、あるいは、町でも、河でも、光の充ちた海辺でも、女の顔でも、すべて人の「美しい」(この言葉の意味は複雑だ)と呼ぶものは、そのものとしては、あくまでその感覚それ自体に意味、あるいは意味があるのであって、それをどう解釈するかという、日常の言葉とか、論文とか、人の表情とかについて、起ってくるのとは全く別の種類の意味をもっている。実をいうとそこには一つの感覚そのものがあるだけである。しかもそれは自然科学が分析する

ような、ある種の計量関係と運動とをもった、ただそこにあるものというものだけではない。ある精神的価値が、もの、そのものとして、そこに凝集して、現実にある、ということである。あるいは価値と存在とが絶対にひきはなすことのできないものとしてそこにあるということである。そこでは、作品にもっとも密接な関係をもっているはずの作者の内面的歴史までが一応それとの関連を失う。抽象的な意味とも作者の人生とも切りはなされた孤独な作品がそこでは、そのまま、価値であり、思想である。このことは分析すれば無限に展開されうるだろう。しかし今はその方面には深入りしないでおこう。私がいいたいのは、芸術作品がそのようなものであるとすれば、そしてそれはそれ以外のどんなものでありえよう、その存在を正しく認識するということは、それがもつあらゆる価値と美とを、その存在に即して、同時に認識するということである。そこには好みとか、趣味とか、傾向とかいう主観的なものは一切あつてはならないし、またありうるはずもない。時には俗な意味での「美」さえも超越されている。もしこういうものがありうるとすれば、それについて論議することは、このような認識が行なわれた後の、あるいは前の、勝手な何の意味もないことなのである。このことは見る側の主体についても同様に言うことができるだろう。ある作品に感動した。それはよい。しかし作品が叙上の様な性質のものである以上、それは同時に認識でなければならぬ。ここでは感動と認識とは一つである。しかもこの一つのもものは理窟上の言葉の上での認識ではなく、その実体は感覚でしかない。これはあくまで厳密な問題である。この感動と認識とが一体になっているもの、それと理窟上の認識と区別するために感動と呼ぼう。

一年前に、あるいは二年前に、芸術と思想との充ちた町パリは、私を歓喜の念でいっぱいにした。

その時私のしたことは、私がこれらの美しいと思つたものに、自分の知っている名前や言葉をやたらにつけたことである。ノートル・ダムは崇高だ、重厚だ。サン・ジュリアンは鄙びた、頽れかけたものもつ美しさをもっている。暗い北の国の空の下を流れるゆるやかなセーヌは静穩で、仄かな燦し銀の照り返しのように輝いている。等々……。そしてそれには必ず自分がそれが「好き」だという甘い感傷が伴っていた。しかしこれらの言葉は何か。それは全然別の内容をもつて私の過去の生活経験を通してあたえられ、あるいは教えられたものであった。言葉とその言葉に対する感激、勿論そればかりではない。私は実物に接した以上、それから感動の幾分はうけていたに相違ない。しかしそれは安易な言葉と感激によつて、たちまちうすめられ、混乱させられてしまつていたのではなかったか。

私は自分の貧しい過去の色ガラスを通して映るパリの姿をよろこんでいたのである。これは錯覚以外の何だろうか。しかしこの色ガラスそのものは、一つの感覚的経験の蓄積され形成されたものである以上、私が一つの生活圈を場所的にはなれた時、徐々に崩壊しはじめていたはずである。それがある程度以上になった時、私は、私の主観的な錯覚から次第に分離してくる、そこに在る、パリそのものの姿をみ、その複雑な裸形の姿の厳しさに茫然とするばかりである。それはまずその硬い物理的性質をもつた石の町として、更に冷たい町として迫ってきた。それは私にはどうにも手のつけようのないものである。カテドラルは積み石の堅固な壁でかこまれ、そこには至る所に彫像や浮彫や壁画が壁面をかざり、ヴィトロローはこの石の壁で囲まれた空間に無量に豊かな光を入れ、グレゴリアンの柔らかに屈曲する合唱が内部を充した。それらが近代に到つて次第に分解し、おのおのの芸術が独立してきたのである。アラン的表現を使えば、その各要素が自己を他と区別しつつ、自己を純粹化していった

のである。人間の主観や主張にもっとも抵抗し、自己に固有の素材的法則を固持する石、自然としての自然、ものとしてのものの象徴である石を、その石に固有の質に従って造形しつつ展開し、そこから他の次元へと分化していった西欧造形の世界は、それが何であるより前に、一つのものであるという特質を強く主張する。それは同時に、それを造形し、価値である「物」となした剛健で、規律ある雄々しい意志的な精神を教える。それは精神が精神として持続しつつ、同時に感覚的なものである音楽と二つの極を形成する。この意味で建築（あるいは彫刻）と音楽とは、ものである精神、精神であるもの、としての造形の両極であり、同時に抱合して、その内奥の核をなすものを一番明らかに示している。それはものの実在と精神の（あるいは意志の）自由と、この二つが抱合して形成する、西欧文明の一つの中核である。今は別に西欧芸術論をするのではないから、芸術の各部門や、さらに文学、思想等には言及しないが、以上述べたものは西欧文明の中心的特質をなし、そのいかなるものも、その規範的秩序を通れることはできない。このものの世界は、私の想像と錯覚との被膜が脱落していった時、その、ものとしての、無関心の態でそこにあつたのである。それは私においては感激の脱落、無感動である。この無関心と無感動が触れ合つて、そこに認識と真実の感動が一つであるような感動が生ずるのは、何時のことか。それは誰にも、まして自分には、判らないし、茫漠としている。第一こういうことを書き連ねることすらが無意味に思えるのである。しかもこのことは各自のもっとも大切な内面の問題に直接連つているのである。

北国の冬の空は、もう一面に暗澹として、電燈が点つたカフェーの内部は俄かに明るくなった。私

の気持も若干亦。私はその夕から夜にかけて、二つの大ミサを見ようと思っていた。一つは夕方の五時半からはじまるリユー・デ・カラムのシリア・メルシット派の教会のミサ、いま一つは、夜の十一時からのはじまるギリシア・メルシット派のサン・ジュリアン・ル・ポール教会のミサである。私はなぜかフランスの教会のミサへゆきたくなかった。リユー・ド・ラ・スルスのベネディクト会の地下室の聖堂で唱われるグレゴリアンのミサはどうかとも思ったが、余り気が進まないので止めた。もう五時すぎになったので私は夕開の漸く濃くなってきた表へ出た。

うす暗いサン・ジャック街を今度は逆に登って行く。私は石の硬い道をこつこつ音をさせながら歩いてゆくことに一種の快感を覚えた。そしてこの歩行がどこまで行っても終らなければよいと思った。どこかで終れば、そこには何か必ず私にとって嫌なことが待っている様な気がした。空気は余り冷たくなかった。途中で横切るブルヴァール・サン・ジェルマンは妙に暗かった。私は車に注意しながらブルヴァールをこした。リユー・デ・ゼコールのところでは、右の方に極度に明るいブルヴァール・サン・ミシエルが見え、無数の車や人が上下していた。カフエー・デュ・ボンが妙にけばけばした光を路面にながしているのが私の目をひいた。私は一種苦痛に似た気持で目をそれからそらし、正面を見た。上り道になる「石の溝」は、間遠にガス燈が寒々と光っているだけで、人通りは殆どなかった。ソルボンヌの裏側にある小さい天文観測の塔が、暗い黒い空に、その暗い空よりもっと黒々と立っていた。ところどころエグーの上を覆う路面と水平の鉄の頑丈な柵の間からたくさんの真白い蒸気が柔かく吹き出していた。私はスフロ街の角からパンテオンの方にまがった。広場のところに来ると、それでもそこには少しは人通りがあった。とりこわされた古いコレージュ・サント・バルブの門のところ